床や談義

ルデヤ通信 第192号
2024. 3. 3

「ポップ・ステップ・ジャンプの生涯 －ある東北人の思い出－」

田井 勲

葛西誠治さんは青森県の下北半島の人である。そして暫く神奈川県の平塚市に居た。そして九州の熊本県の人吉の人として86歳の生涯を終えた。僕が葛西さんと同じ屋根の下で過したのは、1963年から1969年の僅か6年間にすぎない。世の中は東京オリンピックから大阪万博までの時期に当り、目まぐるしく激しく変化し躍動していたときだった。わが家のルデヤ理容店も、いつも5～6人の従業員が住み込み、家族も両親に5人の子供たち、中でも末の妹は前年生れたばかり。そしてその時期は、祖母が病いで同居していた。常時12～15人が右往左往していた。そんな我が家に、葛西さんは北海道から函館だったように思うが、やって来た。「百万人の福音」というキリスト教雑誌に父がのせたルデヤの広告を見て来たと云う。彼は青森で理容師の資格を取り、北海道に渡り、転人として働いていた。キリスト教を求道したのはどこでであったか詳しく知らないが、日曜休日でない普通の理容店では教会へ行くのは難しいので、日曜休日のルデヤに来たのであった。その頃のわが家の朝食の時間は、それは壮観であった。10数人が食卓について、すぐには食事とならない。父が朝の家庭礼拝を司式する。さんびかを歌い、祈りをし、聖書を読み、父が短い説教をする。それが終って朝食となる。その賑やかなこと。そして子供たちは学校へ、そして店の仕事が始るのであった。教会の方も、その頃は大変活気があった。葛西さんが来た年の11月に新しい会堂が建設された時で、父を先頭に、皆各々奉仕活動に参加していた。若いメンバーが多かった。我が家だけで教会員の3分の1を占めていたので、教会活動にも皆熱心であった。葛西さんもその年のクリスマスには、他の4人の人々と共に牧瀬牧師から洗礼を授っている。彼が来た頃、男の従業員は、岡山の金田さん、四国高知の川村クンがいて、男子の部屋は玄関の隣で、2段ベッドが2つあって4人が同宿できた。女子の部屋は2階の6畳間で3人が同居していた。仕事が終ると、男子たち、僕もそうだったが近所の銭湯に行った。そして娯楽は食堂にあったテレビを一緒に見ること。「7人の刑事」や「事件記者」など楽しみに見た。またオリンピックが始ると、特に「東洋の魔女」の活躍に狂喜したのも今はなつかしい。それに葛西さんと言えば、わが家では青森リンゴである。毎年秋になると彼の故郷から大きなリンゴ箱が届いた。彼は藁クズの中に納った、真っ赤な無数の紅玉リンゴをおしげもなく納屋の隅に置いて、「誰でも、すきな時に食べて」と振る舞った。今でもその甘ずっぱい深みのある味が忘れられない。彼は小柄で片足にハンディがあった。幼少児の事故により、片足が短いため、歩行のとき身体が傾いた。しかし杖を使うでもなく、何んて普通人と変らず出来た。彼の手や足は、我々より大きかった。誰も開けられない、大きなビン詰めなど大きな手で苦もなく開けた。ある時故郷で警官をしている弟さんが来たことがあった。なんと6尺豊かな大男だった。彼も事故にあわなければ、大きな人だったに違いないと思った。彼は、ハンディなど物ともせず、休日になると登山をした。丹沢を何度も踏破していた。それにカメラも趣味で、当時まだめずらしいキヤノンの一眼レフで山や花を撮って楽しんでいた。僕などその頃そんな趣味はなかったが、葛西さんが九州へ行ってしまってから僕も彼と同じ山とカメラにのめり込んでいた。彼と僕とは同じ趣味もあった。クラシック音楽とオーディオが好きな点であった。今とちがって生のコンサートなど聞く機会がなかった。専らレコードやFM放送で聴いていた。僕は初期のステレオなどを室に置いていたが、彼は狭い二段ベッドの上段だけの空間だったので、不平も言わず、ポータブル・プレーヤーでヘッドホーンでステレオ・レコードを楽しんでいた。

雇客の電器屋から買った東芝のオープンリール録音器でFMやレコードを録音して楽しんでいた。クラシックだけでなく「A列車で行こう」などのジャズもかなり好きだった。

葛西さんは、職人として、お馴染みの客が何人かおられたが、なかでも、特に彼を名指しで、彼でなければダメと云う雇客がおられた。大磯から外車のフォルクスワーゲン（カブト虫）を運転して来る方だった。中年で少し横柄な方だったが、来られる度に「下北半島はいるか？」と言う。たまたま用事で彼がいない時だったので、「僕でもよろしければ」と言ったが、「じゃまた彼がいるとき来るよ」と帰ってしまわれた。この方が「下北半島」と呼ぶことで僕は、初めて彼がその出であると分った。それまで彼が青森出身とだけ分っていただけだった。今でこそテレビで下北半島北端の大間のマグロの一本釣り漁師などが放映されたり、少し南の「恐山」の「イタコ」信仰など話題となり、その地理も理解できるようになったが、その頃は葛西さんの故郷は地の果てのような感覚だった。その人が南の果て九州の人吉に行く経緯を話そうと思う。それはちょうど僕ら夫婦に長男が生れた年だった。1969年の6月から9月までの3ケ月、我がルデヤに最も短期間の従業員がいたのである。

その方は熊本県人吉市で同業の理容店主で、そして同信のキリスト者でもある屋森正光氏の妹で、屋森紀子さんであった。屋森さんとは、なかなか稀な同信同業の同志として連絡を取り合っていたのである。床や業はどうしても交流範囲がせまくなりがちで、長期旅行もむずかしい。紀子さんは同信同業の機縁をいかし、他所での生活、修業を経験したかったのであろう。兄上に3ケ月という期限つきでルデヤに来られたのだと思う。そして紀子さん、奇しくも妻と同名であったのも妙な縁であったが、熊本の人吉市から湘南平塚に来られた。来られたばかりの時に、僕がその頃買ったばかりの新車と言えば聞えは良いが、軽のホンダN360で市内のあちこちを案内したのを覚えている。そして、すぐに彼女は、他の女子従業員と同室に寝起し、共に食事をし、ルデヤで理容の仕事をしてくださった。仕事もよく出来、良く気付かいが細やかにできる方で、誰に対しても丁寧で優しかった。もちろん同じ教会にも通った。その3ケ月の間、特にその親切以上のものを感じていたのが葛西さんであったであろう。彼は彼女に好意以上のもの、恋をしてしまったのである。妻の紀子の話によれば、彼女は去って行くとき、自分が使った寝具をすっかり仕立て直して帰られたのに、驚き感心していた。紀子さんが去って間もなくの10月中ばの連休を利用して、手に入れた例の車で日光の紅葉を見に行こうと長距離ドライブしようと、葛西さんを誘った。日曜の礼拝の後すぐに出発して、前橋教会の松本牧師の所で泊めてもらい、渋川の方から奥日光へドライブする計画を立てていた。高速道路がなかった頃で、道が渋滞し、前橋教会に着いたのは夜中になってしまった。松本先生には、夜おそく二人で押しかけ迷惑をおかけしてしまったが、初めての紅葉の奥日光を楽しむことが出来た。そのロングドライブの間、ラジオもついてない車だから、ひたすら葛西さんとおしゃべりをして過した。この機会に彼は、紀子さんへの思いを吐露した。僕は「そんなに想っているのなら思い切って彼女のいる人吉に行って真情を告白したらどうだ」「もうすぐ正月になれば、正月休みを理用したら、飛行機で行けばわけなく行けるよ」とけしかけるようなことを言ってしまった。僕は内心そんなことないだろうと思っていた。しかし彼は実行した。ジャンプしたのである。後で知ったが、紀子さんの方はずい分面くらったようである。しかし、彼女のお兄さんや親族の方々は、彼の熱意と真情に感動し、その人柄に好感を持ったようである。紀子さんも次第にその気持が絆されて行ったのであろうと思われる。やがて二人は皆に祝福され人吉の教会で挙式し、市内に理容店を開業した。二人のお子さんにも恵まれた。しかし二度も球磨川による洪水にあい、お店が流されるという災難にもあったが、お二人は月下ずに、電話すると返って来るのは彼らの明るい声で家内も僕もおどろかされた。葛西さんは、下北半島から北海道にホップし、そこから平塚へとステップし、そして熊本の人吉へジャンプしたのであった。彼の生涯は祝福へのみごとな三段とびジャンパーであった。その彼を心温く迎い入れた紀子さんもすばらしい。